

「赦す」ことから始まる世界平和

六年 R・Y

私は最近「異文化」を理解するということはどういうことか、また、それをする事でどのような社会貢献に繋がるかについて、考える機会が与えられることがありました。「異文化」と言っても、これは様々な国や地域間における関係を指す言葉ですから、どのような文化が異文化とみなされるのかはそれぞれ異なり、また必ずしも、その対象とされる文化が一对一の関係で構成されるとは限りません。つまり、何通りのもの文化間の関係が、同時に「異文化」の言葉の対象物となるのです。

ところで私は、現在の世界を一言で表すと、「グローバル化」という言葉が適切ではないかと考えます。

「グローバル化」とは、今まで国家や地域で区別されていた様々な事柄について、地球を一つの単位として考えることで、国家や国境に関係なく、モノや情報のやり取りがなされる状況のことを指す言葉です。

グローバル化が進むことのメリットに、住んでいる国や地域に関わらず、人々が同じモノを手に入れることができる点が挙げられます。また、映像の伝達技術の発展やインターネットの普及により、世界中で起きている様々な事柄を知ることが可能である点や、自分自身を世界に発信する手段の一つとして使うこともできる点で、グローバル化は私たちの生活をとても便利なものにしたと言えます。

しかしながら、グローバル化は、社会にマイナスな影響を与えていることも見落としてはならないでしょう。なぜなら、グローバル化で世界がつながるようになったことは、今まで形成されてきた国家や、地域間に存在していた違いがなくなり、国家や国籍そのものの存在が危ぶまれる状態にあることも意味するからです。そうとなれば、国籍、民族、宗教、言語、性別などの属性から構成される、私たちの自己同一性、アイデンティティーの存在価値は高まる一方です。アイデンティティーを形成する国家や民族の存在が危ぶまれたときに、人々はこの動きに逆らって、自己の主張を強くするようになるのではないかと私は考えます。その一つの例として、ISの存在が挙げられるのではないのでしょうか。

彼らが行う過激なテロ行為は、中東地域に留まらず、世界各地に広がって

ます。その構成員は外国人の割合が多く、特にヨーロッパなど、先進国からの志願兵が目立ちます。全く交流のない地域間で、過激な原理主義が共有され、テロという行為でつながっている現状は、皮肉にもグローバル化のもたらした結果であると言えます。例えば、I Sがこれまでの過激派と異なる特徴として、インターネットの動画配信や、SNSで構成員を勧誘している点があります。また、捕虜を斬首する動画の配信などは、現代の私たちから見るとかなり中世的に映りますが、実際のところこのような行為は、最先端のテクノロジーで駆使して行われているのです。そう考えると、インターネットによるグローバル化が、これほどまでに進んでいなければ、彼らの活動は中東地域に限定した活動になっていたのではないだろうか、という疑問を抱かずにはいられません。また、グローバル化のもたらしたボーダーレスな現状が、彼らの中に潜在していた民族や、宗教などのアイデンティティを覚醒させる要因となったと言えるのではないのでしょうか。

皆さんは、去年の平和学習で、ルワンダの内戦でツチ族、フツ族の民族間に起きた、大量虐殺が題材に取り上げられ、被害者と加害者の歩み寄りとして行われている取り組みについての講演があったことを覚えていますか。その講演では、フツ族とツチ族の和解を進める取り組みの一つとして、加害者側のフツ族は、被害者側のツチ族の家族が暮らすための家を建てることで、罪を償うというものが紹介されていました。この取り組みは加害者側の一方的な贖罪だけでなく、被害者側には、罪を犯した相手への「赦し」を促すことで、両民族間の関係改善を目的としていました。

この講演を聞いたとき私は衝撃を受けました。というのも、六年間の恵泉での生活で平和教育やキリスト教教育を受け、「平和を実現する女性になりなさい」という言葉や「人にしてもらいたいと思うことを人にもしなさい」という聖句を受け入れてきた私は、誰もが平和を望んでいて、世界中が平和の実現のための歩み寄りに積極的であると思い込んでいたからです。しかし、実際には私の常識とは正反対の世界が存在し、人々が互いに殺し合い、傷つけ合っている現実があることを突き付けられました。

ルワンダの大量虐殺における関係改善の際に、ツチ族側に求められたフツ族への「赦し」という言葉から、私は昨年現代文で扱った、大澤真幸の「責任と赦し」を思い出しました。この文章には、後からつけられた名前と呼ばれている、精神的成長が著しく遅れていた子どもが、最初につけられた名前で、呼び

かけられたことをきっかけに苦境を乗り越え、責任を担いうる主体への成熟を果たしたという、ある評論家の文章の事例が引用されています。それをふまえて、筆者の大澤真幸は責任を担うこと、相手を赦すことの重要性を論じているのです。

筆者は、名前を呼ぶという行為は、その人が誰であれ、その存在を全面的に認める「無条件の赦しの印」であると主張します。この文章によれば、通常私たちが非人道的で、残虐な犯罪に関与した犯罪者に対して抱く、断じて赦すべきではないという強い感情と、その者たちに厳罰を課したいという願いは、私たちが無意識に、犯罪者からの赦しを乞う声を求めていることに由来しています。しかし、罪人が自らの罪を認めるという行為は、罪人が罪人以上の存在になったことを意味する点において、罪人が善人に変化した後になされる赦しは、真の赦しと言うことはできないのです。それよりもむしろ、この赦しは罪人が善人になった場合にのみ、効果を発揮すると言えるでしょう。それに対して、筆者の述べる「真の赦し」とは、相手が罪人であるという認識を持ちつつ、その罪人の罪を、なかったかのようにみなす決断のことを指します。最後に筆者は、二〇〇一年九月十一日にアメリカで起きた同時多発テロを引き合いに出し、自由な社会を樹立するためには、テロリストを罰するのではなく、赦すことが私たちに残されたほとんど唯一の方法であると主張しつつも、「赦す」行為の具体的な内容は明記せず、読者に委ねたままで文章を締めくくります。

そのように考えると、中東を中心に世界各国に広まっている「イスラム国」のテロ行為には、「赦す」という行為が、正しく行われなかったことに、原因があると言えるのではないのでしょうか。I Sがテロ行為を遂行し、残虐な殺戮を続ける理由の一つとして、現在の世界をイスラム教の教えに基づく、自分たちの理想の世界にすることを目指していることが挙げられます。そのために、現地では多くのキリスト教徒が捕らえられ、イスラム教への強制的な改宗を迫られたり、またはキリスト教徒であるという理由で殺害されるといった実態があるようです。I S側の主張は、現在存在している様々な文化を、いずれは自分たちのイスラム教一色に染めることを望んでいるように解釈できます。つまり、近年の急速なグローバル化がもたらしたとも言えるこのイスラム過激派の成立は、皮肉なことにも世界をイスラム化するという、ある意味でのグローバル化に向かっていると言うべきでしょう。

このようにI Sに限らず、様々なイスラム過激派が、年々その活動を活発に

しています。過激派の行う空爆や市街地を狙ったテロなどには、アメリカを中心とした欧米諸国が対抗していますが、このような欧米諸国の対策は、この問題を解決に向かわせるどころか、むしろ問題を一層複雑にしているように感じずにはられません。また、イスラム過激派に対して行われている空爆そのものが、適切な対処法であるのかということにも疑問が残ります。武力には武力で対抗することで、その場を収めようとする方法が、国際問題を解決する上でふさわしい方法ではないということは、これまでの様々な経験から、私たち自身が一番理解しているはずです。

このように考えてみると、世界をイスラム化することで、平和な世界を実現できると主張し、テロ行為を続ける I S と、I S は世界の平和を乱す存在であるとして、空爆を行う欧米諸国との間に、大きな違いは無いように思えます。これでは、両者が互いの主張を正当化することだけを重要視するようになり、根本的な問題の解決には至らないでしょう。

それでは、いったいどのようにしたら、言語や宗教、人々の思考が大きく異なる国家や、地域間に生じる争いを解決することができるのでしょうか。また、そもそも私たち人類は過去に大きな戦争を幾度も経験し、その度に平和の大切さを身をもって感じているにも関わらず、なぜ戦争を繰り返すのでしょうか。現在の私の生活は、終わりの見えない戦争に怯える必要もなく、人権も尊重されています。さらに、恵泉で過ごした六年間で私は、平和の大切さ、それぞれに異なる人を、友として受け入れることの尊さを学び、今までの人生がどれだけ恵まれたものであるかを日々実感しています。一方で、世界には私の送っている生活とはかけ離れた悲惨な状況の中で、毎日を必死に生きている人も多くいます。このような現状を知るたびに、見ていることしかできない自分を、無力な存在であると感じると同時に、国家間や組織間に生じる問題を武力によって解決しようとするリーダーたちは、戦争に対してどのような考えを持っているのかと疑問を抱かずにはられません。

もしここで、大澤真幸から与えられた問いに答えようとするならば、私は「赦す」ことこそが「異文化理解」の中核であるのではないかと考えます。最近いたるところで耳にする「異文化理解」というフレーズは、その単語の意味を端的に表現しているように見えて、「異文化とは何か」や、「理解するとはどういうことか」ということに関する定義づけには曖昧な部分があるように感じました。そこで私は「異文化理解」をそれぞれの国や地域ごとで異なる民族や

宗教、言語の違いを認め、それを受け入れることであると定義づけたいと思います。また、異文化を理解する際には、個人的な偏見やそれぞれの文化ごとに優劣を設けることなく、違いを尊重し、多様性に柔軟な認識を持つことが一番重要なことでしょう。つまり、このような「異文化理解」に対する定義が大澤真幸の「赦し」に対する問いへの私なりの答えです。

私は、「イスラム国」と欧米諸国の両者が「赦す」こと、つまり「異文化理解」をすることこそが、世界が抱えているイスラム過激派の問題の現状に、前向きな影響を与えるであろうと考えています。異文化間に生じる問題は、互いの存在を否定し、命を奪い合うのではなく、大澤真幸の「責任と赦し」で引用された少年がそうであったように、相手の存在を受け入れること、さらに、自分が相手から受け入れられていると実感することによってのみ、解決が図られるのです。確かに、現実では互いの存在を認めて受け入れ、一方で自分も受け入れられている実感を得ることは困難でしょう。それぞれの国の経済的な事情や、政治的な問題を考えると、「異文化理解」が簡単ではないことは容易に想像がつきます。しかし、それでも私は、最後まで人間の潜在能力を信じたいのです。機械や兵器によって作られる平和ではなく、私たちの意識の変化から創り出される平和こそが、真の平和ではないでしょうか。その実現の為にはやはり、私たちが正しいやり方で「異文化理解」を図ることが必須であり、このような「異文化理解」こそが、これからの世界平和に貢献できる大きな可能性を持っているのです。